

これが生活保護の暮らし

「まず、私たちの本当の姿を知って」

DV（ドメスティックバイオレンス）から逃れ、生活保護制度を利用した女性が経験をつづった本を出した。生活保護の当事者による数少ない体験記だ。生活保護基準引き下げが審議されるなか、著者の和久井みちるさんは「まず、私たちの本当の姿を知ってほしい」と訴える。

制度利用した女性 体験記

和久井さんは首都圏に住む50代の女性。夫の暴力を逃れて一人で暮らし始めた。蓄えも家族も失い、うつ病や腰痛に苦しむ日々。頼ったのは生活保護制度だった。

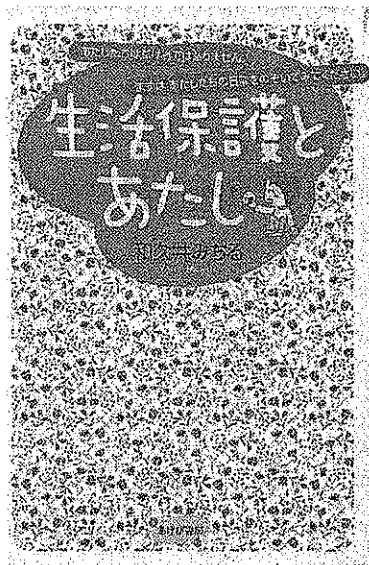
申請から2週間。自治体が預貯金や生命保険がないか調査した書類は70ページになった。役所が親族に文書で扶養を求めるため、親やきょうだいの連絡先を問いただされた。「心配をかけたくないのに。これは精神的な拷問です」

保護費は月11万円ほど。水光熱費を切りつめ、熱中症で搬送された。医療機関での自己負担はないが、通院のために健康保険証代わりの「医療券」を事前に役所でもらわなければなら

ばならない。そもそも生活保護の指定医療機関にしかかかれない。「お金がかからないから好きだけ病院に行けるなんて言われるけれど、うそです」

「怠け者」「もらいすぎ」生活保護がそう報じられるたび、胸をしめつけられた。いつも監視されているような気分が消えない。そんな気持ちが変わったきっかけは、同じ利用者とお茶を飲む集まりを始めたことだった。「仲間ができて、水を得た魚のように元気になるました」

お茶会は参加者が増え、定例の集まりに発展した。和久井さんはうつ病の症状が落ち着いて働けるように



なり、約3年半の生活保護を終えた。

生活保護が「恥」ととらえられがちで、勇気を出して声を上げる利用者は少ない。政府の審議会など政策決定の場にも参加できない。当事者の声が反映されないまま、生活保護基準引き下げや就労指導の強化といった引き締め策が次々打ち出された。

「私たちは怠け者じゃないし、生活保護制度は牢獄なんかじゃない。制度が変えられようとしている今こそ、伝えなきゃと思った」と話す。

「生活保護とあたし」はあけび書房刊。税別1400円。

(永田豊隆)